令和５年４月 20 日

市政記者各位

地方独立行政法人 長崎市立病院機構
理事長　片峰　茂

手術支援ロボット「ダビンチ」導入
長崎市内２カ所目の設置

地方独立行政法人 長崎市立病院機構 長崎みなとメディカルセンター（理事長：片峰　茂、院長：門田　淳一）は、手術支援ロボット「ダビンチ」を導入し、令和５年４月から、泌尿器科において手術を開始しました。手術支援ロボットの導入は、長崎県内４カ所目、長崎市内では長崎大学病院に次いで、２カ所目の導入となります。

■手術支援ロボット「ダビンチ」について

手術支援ロボット「ダビンチ」は、1999 年にアメリカで開発された内視鏡術支援ロボットです。

ロボット手術は従来の腹腔鏡下手術と同じようにいくつかの数センチ程度の小さな切開部を作り、ハイビジョン３D カメラと３本の鉗子やメスを取り付けたロボットアームを接続し、鮮明な立体画像を見ながら医師がアームを遠隔で操作し手術する仕組みです。ダビンチの鉗子は関節構造を持ち人間の手より大きな可動域を備えており、従来の内視鏡手術用鉗子では難しかった操作も可能になります。また先端が自由に回転・角度を変更でき、人の手の届かない臓器の裏側も手術が可能となります。さらに手ぶれ補正機能も備えており、精度が高く、安定した手術を行うことができます。

▸手術支援ロボット「ダビンチ」手術イメージ

■手術支援ロボット「ダビンチ」による手術の特長について

①手術創が小さい、出血量が少ない

ダビンチでの手術は腹腔鏡手術と同じく、体に小さな穴を数か所開け、そこから鉗子を挿入して行います。開腹手術に比べて傷口が小さいのが特長です。傷口が小さいため、開腹手術に比べると極めて少ない出血量です。

②より早い回復、日常活動への復帰（合併症のリスクが低い）

傷口が小さいため、傷の痛みが少なく、術後の回復は早い傾向にあり、合併症のリスクも大幅に低減できるため、入院期間の短縮が期待できます。

③機能の温存が向上

鉗子の正確で細密な動きによって体の機能を温存させる手術が期待できます。

前立腺全摘除術では、開腹手術に比べて尿失禁率が低減し、勃起不全の確率が低下することが報告されています。

■現在の対象疾患及び今後の予定について

当面は、泌尿器科において前立腺癌に対する手術治療で使用します。今後、医師のトレーニング等の準備を経て、順次呼吸器外科、消化器外科、産科・婦人科に対象診療科を拡大していく予定です。

【お問い合わせ】
地方独立行政法人 長崎市立病院機構
事務部 総務課：丹羽麻子
電話：095-822-3251（内線 3713）E-mail:niwa_asako@ncho.jp

■取材について

本件について、取材をご希望の際は、お問い合わせ先までご連絡ください。ご希望の日程をお伺いした上で、手術室の空き状況及び担当医のスケジュールを踏まえ、調整させていただきたく存じます。

なお、以下の写真について、提供することができます。

→稼働前に関係者によるシミュレーションを行っている様子

→ダビンチによる手術中の様子

←執刀医がサージョンコンソールと呼ばれるコックピットで、手術をする様子

【お問い合わせ】
地方独立行政法人 長崎市立病院機構
事務部 総務課：丹羽麻子
電話：095-822-3251（内線 3713）E-mail:niwa_asako@ncho.jp